

---

# 銀河英雄年代史外伝 サーカスの始まり

雨霧颯太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河英雄年代史外伝 サークスの始まり

### 【Nコード】

N6211V

### 【作者名】

雨霧颯太

### 【あらすじ】

銀河英雄伝説の二次創作小説です。

新帝国歴十四年を舞台に、若き砲術士官ヴェルナー・テンシュテットの活躍と恋を描いた小説です。

戦艦サターンに赴任する砲術士官ヴェルナー・テンシュテット中尉。彼はそこで士官学校時代の先輩と後輩に再会する。級友との再会に喜ぶヴェルナーの前に一人の女性下士官が立つ……。

銀河英雄年代史外伝シリーズの主人公として活躍してきたヴェルナ  
ー。そして、その艦隊旗艦であるサターン。彼が愛し続けた艦、そ  
のルーツがこの話で分かります。

この小説は、らいとすたっふるルール2004にしたがって作成され  
ています

# プロローグ(前書き)

## プロローグ

新帝国暦二六年一〇月五日、軍務省教導本部長兼教導艦隊司令官に昇進したヴェルナー・テンシュテット大將はフェザーン郊外にある帝国軍墓地にいた。ここには帝都フェザーン遷都後に殉職、戦死した帝国軍將兵たちが永遠の眠りについていた。

どこまでも広がっていくかに思える広大な墓地を、ヴェルナーは右手に花束を携えて歩いていった。そして、ある墓の前で止まると、ひざまづいて花束を供え、静かに一礼した。

「また、今年も来たよ」

彼が死者との対話を終えようとした時、軍靴のかすかな音が風に乗って聞こえて来た。ヴェルナーが音の方に顔を向けると、一人の軍人が花束を持って近づいて来た。

「ごぶさたしています。ランベルツ先輩」

「久しぶりだな。ヴェルナー」

帝国軍宇宙艦隊司令長官、ハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー元帥だった。彼もまた、墓前に花を供えると黙祷を捧げた。

「もう、一一年になるか。あの日から」

黙祷を終えたランベルツが静かに言った。ヴェルナーは答えなかった。ただ、黙って墓に刻まれた名前を見つめていた。

アンジェラ・クルツリンガー。ヴェルナーの婚約者の名前だった。

## 第一話

新帝国暦一四年四月一日、バーラト自治政府軍での出向任務を終えたヴェルナー・テンシュテット中尉は帝国軍バイエルライン艦隊に所属する戦艦サターンの砲術士官として着任した。

彼の士官学校時代の先輩でサターンの副長であったハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー中佐がヴェルナーのバーラト自治政府軍での戦績を知って、彼をサターンの砲術士官に推挙したのだった。

「卿のバーラト自治政府軍での活躍は聞いている。この艦においても卿の力を存分に発揮して欲しい」

艦長のエルンスト・クラウス大佐が言った。エルンスト・クラウス大佐は五八歳、常に最前線を戦い抜いて来た帝国軍の中でも歴戦の勇士で、顔中についた傷が、その過酷さと戦歴を何よりも雄弁に物語っていた。

初めての顔合わせでひとにらみされたとき、その外見でヴェルナーは萎縮してしまっただが、あとでランベルツより顔とは正反対の穏やかな人物で、艦長室にあるサポテンの世話が何より好きだということとを教えられると胸を撫で下ろすと同時に、そのあまりのギャップに笑ってしまった。

確かな戦績とその穏やかな性格が皆の人望を集めている名艦長であった。

艦長との顔合わせの後、ランバルツは彼の担当となる第一砲撃指揮所に向かった。ランベルツの卒業以来6年ぶりの再会だけあって、

第一砲撃指揮所までの道中は昔話に華が咲いた。

あと少しで彼の持ち場に着くところで、彼はもう一人懐かしい顔と再会することになった。

「ヴェルナー先輩？ 久しぶりです！」

ヴェルナーの士官学校時代の後輩であるアルベルト・フォン・ビスマルク少尉だった。アルベルトとヴェルナーは二歳違いだったが、ともに砲科の専攻で、士官学校時代を通じて仲がよく、アルベルトはいつもヴェルナーのあとをついて行動していた。

ヴェルナーは可愛い後輩との再会を素直に喜んだ。

「アルベルトじゃないか！ そうか、お前もこの艦だったのか。また一緒に組むことが出来て嬉しいよ」

「全くです。ここで直接知っているのはランベルツ先輩ぐらいですからね。寂しくて夜も寝られませんでしたよ」

「よく言うよ。座学の講義の時なんて真っ先に居眠りしていた奴が大方、任務中に居眠りしていたんだらう？」

ヴェルナーは冗談めかして言った。そんなことはないと言った。そんなことを否定するアルベルトをランベルツもヴェルナーもしょうがない奴と言って笑った

士官学校時代からの旧交を温めたあと、ランベルツはここから先の案内をアルベルトに任せて艦橋に戻っていった。



## 第二話

「さて、着きましたよ。先輩」

アルベルトは第一砲撃指揮所に案内した。戦艦サターンの前方の砲撃を指揮するこの場所は、戦艦サターンの攻撃の要ともなる重要な場所だった。ヴェルナーはここで、前方に位置する全ての砲台の指揮を統括して行うことになる。

「そして、僕が砲術士官補佐ということになります。よろしく。先輩」

アルベルトがいたはずらっぽく笑った。何のことはない、廊下で出会ったのも、全てアルベルトの計算のうちだったのだ。ヴェルナーは後輩のサプライズに苦笑しつつも手を差し出した。

「ああ、こちらこそよろしく頼む。ビスマルク少尉」

士官学校時代の先輩、後輩は固い握手を交わした。

「次に、砲手たちを紹介します」

そう言って、アルベルトはヴェルナーの部下になる砲手たちを連れて来た。砲手たちは彼よりも若い幼年学校を出たてのものから、白髪頭のベテランまで年齢も性別も様々だった。

中でもヴェルナーが気になったのは、彼を挑戦的なまなざしで見つめる若い女性兵士だった。アルベルトの紹介のあと、ヴェルナーは砲手たちにむけて自己紹介をした。

「今日から卿らの指揮官になる、ヴェルナー・テンシュテット中尉だ。この艦では卿らの方が私よりもずっと先輩だ。これから、いろいろ教えて欲しい」

ヴェルナーは頭を下げた。アルベルトが解散を言いかけたその時、女性兵士が手をあげた。

「ねえ、中尉殿、ずいぶん若そうだけれど、おいくつでいらっしやいますか？」

「二四だが、それが関係あるのかい？ ええと……」

「アンジエラ・クルツリンガー曹長よ。中尉。私とそう変わらない年じゃない。そんな人に命を預けるのだから、せめて砲手としてそれなりの腕を持っているということを証明して欲しいものだわ」

アンジエラはヴェルナーに敬語を外して言った。

「おい！ 上官に向かってその態度は……」

アルベルトがアンジエラを叱りつけようとしたが、アンジエラに手痛い逆撃をくらうことになった。

「何？ ビスマルク少尉。この間、訓練で私にぼろ負けしたくせに」  
そう言われて、アルベルトは黙ってしまった。ヴェルナーは驚いた。アルベルトの腕は決して悪いものではない。悪くないどころか砲手としての腕は十分一流として通用するものだった。そのアルベルトを破るアンジエラの実力はどれほどのものか、ヴェルナーは知っていた。

くなくなった。

「いいだろう。クルツリンガー曹長、ひと勝負いこうじゃないか」

「ええ。……何かかけるものがないと面白くないわね。負けたら相手の言うことを何でも聞くって言うのはどう？」

アンジェラの自信満々の提案にヴェルナーは頷いた。

「いいだろう」

### 第三話

そう言うと、ヴェルナーらは訓練ルームへと向かった。訓練ルームに備え付けられたシミュレーターで、ヴェルナーとアンジェラの二人の戦いが始まった。バーラト自治政府で三年間、対空戦技の元祖と言われるハーヴェイ・ウォールバンガー大佐の薫陶を受けて来たヴェルナーである。狙いは極めて正確で一発の無駄な弾を撃たずに標的を撃破していった。対するアンジェラも負けてはいなかった。彼女の射撃はヴェルナーほど正確ではなかったが、効率的な射撃だった。一機ずつ撃墜するヴェルナーとは対照的に、アンジェラは二機同時に撃墜することもしばしばあった。

アルベルトも、そして他の砲手たちもその対戦に魅入っていた。二人はともに砲手として彼らの常識を超えていた。ヴェルナーが二機落とせば、アンジェラも二機落とす。勝負はエネルギー切れになるまでわからなかった。最後の一発を残したとき、ヴェルナーとアンジェラのスコアは並んでいた。ヴェルナーが最後の二機を撃ち抜いたとき、アンジェラは二機同時に撃墜した。

勝負が決まった瞬間、大きな歓声が上がった。それはアンジェラをたたえるための歓声だけでなく、砲手として最高の技量を持った二人の戦いをたたえる歓声であった。

戦いが終わったあと。アンジェラは握手を申し出た。

「さつきは失礼なことと言ってごめん。中尉、やるねえ。私がかこまで追いつめられたのは初めてだよ」

「俺の方こそ、ハーヴェイ大佐以外で負けたのは初めてだ。できれ

ば、その言葉遣いも改めてくれると嬉しいんだがね。クルツリンガ  
「曹長」

「アンジェラでいいよ。私はバーラト星系育才だからね。今更直せないわ。それより、負けは負けだからね。ちゃんと何でも言うこと一つ聞いてもらうよ」

ヴェルナーは先ほどの賭けを思い出した。我ながら馬鹿な賭けをしたと後悔したが、負けたのは自分の責任であることは彼自身承知していた。ヴェルナーはおそろおそろアンジェラに聞いた。

「今度の上陸の時、私に付き合ってよ」

## 第四話

新帝国暦一四年五月一日、戦艦サターンは一ヶ月の訓練航海を終えて、フェザーン宇宙港に帰港した。ヴェルナーらサターンのクルーは二週間の休暇を与えられた。

「二週間の休暇か、何をしてすごそうかな」

腕を頭の後ろに組んで、アルベルトが言った。

「家族と久しぶりに会うのだから、思いっきり甘えて来たらいいんじゃないか？」

ヴェルナーは二つ年少の後輩に言った。

「そりゃ、もちろん甘えますけど、なかなか友達とのスケジュールが合わなくて遊びに行けないんですよ。でも、先輩はいいですよ。ね。クルツリンガー曹長とデート出来て」

ヴェルナーは顔を真っ赤にした。

「ばか！ あれはお前……ちがうぞ。アンジェラの賭けに負けて、仕方なくだな……」

「おや？ アンジェラとはずいぶん先輩も仲がよろしい様子で」

アルベルトはにやりと笑った。初めて会った日から、この一ヶ月、ヴェルナーとアンジェラの仲は日を追うごとに親密になっていった。

幼年学校を出てすぐに軍に入った彼女は実戦経験においてヴェルナーに優り、その経験に裏打ちされた彼女の射撃術はヴェルナーにとって何より信頼出来る能力であった。

彼女は砲手としてだけでなく、下士官としても優秀だった。彼女の明るく、フランクな性格は砲手たちの声を聴き取るのに一役買っていた。話しやすい相手として、若い砲手たちは彼女に何でも相談したのである。アンジェラは彼らの声を聞き、ヴェルナーら士官に盛んに意見を具申し続けた。

ヴェルナーとアルベルトは自分の権限の出来る範囲で砲手たちの意見を反映し、また、自らの意見や考えをアンジェラを通すことで砲手たちに伝えた。下士官としてアンジェラは見事に砲手と、ヴェルナーら士官とのパイプ役を果たしたのだった。

このこともあって、現場の責任者であるヴェルナーとアンジェラは周囲の想像以上にお互いの時間を共有していた。意見の食い違いから、衝突することも多々会ったが、砂浜の小石が衝突を繰り返して角が取れて出来上がっていくように、ひと月の間に二人はお互い最も信頼しあえる仲になっていた。

「まあ、お前には悪いが、明日のスケジュールは埋まってるんだ」

ヴェルナーは休暇中に暇をもてあますであろう不肖の後輩に言った。

「いえいえ。クルツリンガー曹長には先輩がお似合いですよ。僕なんかとてもとても……」

そう言ってアルベルトは両手を上げて無理のジェスチャーをした。ヴェルナーらは二週間後の再会を約束してその場を別れた。

## 第五話

翌日、ヴェルナーはフェザーンの中央広場にいた。中央広場は帝都フェザーン市街地の中央部に位置し、中でも広場中央にある大きな噴水はフェザーン市民ならば誰もが知る待ち合わせ場所で、恋人を待つ者、仲間を待つ学生たち、旧知の友に会う老人、様々な人が思いの姿で待ち人を待っていた。

「そろそろ時間かな」

ヴェルナーは時計を見た。私服のヴェルナーはTシャツにジャケット、そしてジーンズと軍服姿とはかけ離れてカジュアルな格好をしていた。ヴェルナーも年頃の青年であったので、お洒落に関して是人並み程度には気を配っており、普段軍服であるだけに羽目を外したいと思い、オフにはカジユアルな格好をすることを好んでいた。

ヴェルナーは時計を見ていると真正面から自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。声の主の方を向くと、彼は目を疑った。活発な下士官はヴェルナーの想像とは真逆の格好をしていたからだ。

普段のアンジエラは艦内での動きやすさを考え、茶色の長い髪をポニーテールにしていた。

しかし、今、ヴェルナーの目の前にいたアンジエラは髪を下ろし、淡い花柄のブラウスとブラウンのロングスカートと言う、いわゆる「女の子らしい」格好をしていた。

ヴェルナーは普段のギャップに驚いたが、それ以上に彼女のその格好があまりに似合っていたことに驚き、思わず声を失ってしまった。



「何？　あまりに私が素敵だから見とれてた？」

茶色の髪の下士官はしてやったりという顔でヴェルナーに言った。

「ん？　ああ、馬子にも衣装っていうからな」

凶星をつかれたヴェルナーは苦し紛れに言った。

「しかし、予想と違うなあ。ヴェルナーって普段はおカタイからさあ。てつきりタキシードで来るかと思った」

「そんなことあるか！」

アンジェラの冗談をヴェルナーは笑って否定し、二人は映画館へ向かった。もともと、アンジェラが映画の前売り券を持っており、一人で行くのが嫌だったアンジェラがヴェルナーを誘ったのだった。内容はお決まりの恋愛映画で、歴史物が好きなヴェルナーは興味を持たなかったが、横目で目に涙を浮かべるアンジェラを見て、彼女の意外な一面を発見出来たと、別の意味で映画を楽しむことが出来た。

## 第六話

「次はゲームをしよう!」

そう言つて、彼女はヴェルナーを映画館の隣にある大きなゲームセンターに連れて行つた。ゲームの物色をしていると、彼女はアルゲームの前で足を止めた。

「あれやろう! ヴェルナー」

彼女が指差した先には、ブラスターのシューティングゲームがあつた。

「え? あれはちょっと……」

ヴェルナーは躊躇し、後ろにさがつた。

「いいからやろう。勝つた方が晩ご飯おごりだからね」

「あ、おい!」

ヴェルナーの返答も聞かず、アンジエラはヴェルナーをゲーム機まで連れて行き、一ヶ月前以来の再戦が行われた。

二人の二回戦目はアンジエラの圧勝に終わった。アンジエラはジークフリード・キルヒアイスに及ばないまでも、十分一流と呼ぶに相応しい腕前を持ち、たちまちのうちにゲームセンターの最高記録を塗りかえてしまった。

対するヴェルナーは射撃に関しては全くの劣等生だった。士官学校時代の試験に至っては落第すれすれの成績で、なんとか留年を免れていた。

彼の射撃の成績について、過去、ヴェルナーは親友のフランク・フオン・シュタイエルマルクにこう言ったことがある。

「俺は興味のあることしか勉強しないし、練習もしないのさ」

ヴェルナーの言に対し、親友は皮肉のスパイスをたっぷり付けてこう言い返した。

「何を言っているんだ。お前の場合、練習しないのではなくて、練習すらできないんだろっが」

親友の毒舌にぐうの音も出なかったヴェルナーはばつが悪そうに読んでいた本に顔を埋めたとされている。

「下手くそだねえ。ヴェルナー。どうしてあんなに外せるのか、逆に教えて欲しいくらいだよ」

勝者のアンジエラは上機嫌でヴェルナーに言った。

「射撃は昔から苦手なんだよ。それに、銃なんか使わなくても、戦い方はいくらでもあるだろうっ？」

「格闘は？」

「それも苦手だ」

「……あんた、それでよく軍人やってられるね」

あきれ顔でアンジェラは言った。こと、体力を使うこと全般において、彼は全くと言っていいほど無能だった。だからこそ、この時代、体をつかうことなく戦いが出るものとして、砲術家を選択したのだった。

そんな彼の考えに思いを馳せようとせず、アンジェラは上機嫌で歩いていった。ゲームセンターを出て、次の場所まで行こうとしたとき、何かがヴェルナーの脚にぶつかった。

## 第七話

ヴェルナーの足もとでは、五歳ぐらいの子どもが泣いていた。

「お母さん……お母さん……」

「迷子か……困ったな」

母親を呼んで泣きじゃくる子どもにヴェルナーがどうすべきか悩んで頭をかいてしていると、先を歩いていたアンジェラが事態に気づいて戻って来た。

「坊や？ どうしたの？ お姉さんに話してごらん？」

めったに話さない優しい声でアンジェラは子どもに尋ねた。子どもは答えることが出来ず、ただ泣きじゃくっていた。

「どうやら、この子を泣き止ませないとだめみたい」

アンジェラは小さくため息をついた。

「泣き止まずと言ってもなあ……そうだ！」

ヴェルナーは子どもの前にしゃがみこむと、片方の手をポケットに入れて人懐っこい笑みを向けた。子どもがヴェルナーの方を見ると、ヴェルナーはポケットに入っていた手を広げた。すると手のひらには三個のボールが現れた。ヴェルナーは宙高くボールを投げ上げるとジャグリングを始めた。

ジャグリングをしながら、彼はポケットに手を入れては、ボールを出していった。最終的には六個のボールが彼によって優雅に宙を舞っていた。

時には手で、時には足でヴェルナーは器用にボールを操った。その様子に子どもやアンジェラはもちろん、通りすがりの人まで目が釘付けになっていた。

子どもが泣き止んだのを見たヴェルナーは宙を舞う一個のボールに一つ一つ、手に止まったボールを当てていった。次々とボールに当てられて、最後のボールは天高く舞い上がると、彼の手に吸い込まれるように戻っていった。

最後の一個をキャッチした瞬間、周囲から歓声が上がった。歓声が引いたとき、騒ぎを見た母親が観衆の間を縫ってやって来た。

「ジャン！ ジャン・ロベール！」

ジャン・ロベールと呼ばれた子どもは笑って母親の胸に飛び込んだ。父親と思われる亜麻色の髪をした男性がやって来て、ヴェルナーに礼を言った。

「ありがとうございます。息子の面倒を見てくださって、お礼のしようがありません」

「いえ、どういたしまして。それより、ジャン・ロベール君のお父さん、お母さんが見つかって本当に良かった」

子どもの両親はヴェルナーに礼を言うと、人ごみの中に消えていった。

「あの人、どこかで……」

ヴェルナーは子どもの父親のことが少し気になっていた。面識はなかったが、どこかで見たような記憶が確かにあった。

ヴェルナーが記憶野にあるページをひもといているとアンジェラがやって来た。

「ヴェルナー、あんたすごい人に声かけられていたじゃない」

「すごい人？」

「ユリアン・ミンツよ！ 帝国立憲の父。あんたがいつも読んでいる本の作者よ」

ヴェルナーの中で全ての記憶がつながった。愛読書であるヤン・ウエンリー語録の筆者だったのだ。彼は知らず知らずのうちにユリアンを見知っていたことに気がついた。

「しまった。サインをもらっておけば良かった」

ヴェルナーは額に手をあてて、天を仰いだ。

「でも、そうしたら興ざめだったと思うよ。ユリアン・ミンツから初対面で嫌われたわね。きつと」

「まあ、サインはともかく、ジャン・ロベール君がご両親に会えてよかったよ。サインはまたの機会にしよう。もっとも、向こうは俺のことなんかはすぐに忘れてしまっただろうけどね」

後日談になるが、後年、ヴェルナーは立体TVの対談番組でユリアンとの再会を果たした。亜麻色髪の学者はその時のことを鮮明に覚えており、ヴェルナーが冗談で当時サインをもらいそこねたことを話すと、ユリアンは苦笑しながらも「息子を楽しませてくれたお礼です」と言つて、ヴェルナーの愛読書であるヤン・ウエンリー語録にサインをしてくれた。ヴェルナーはそのことを深く感謝し、サインされた本を生涯大切にしたという。



## 第八話

ユリアン親子と別れたあと、二人はレストランで夕食をとった。アンジェラはワインのボトルを丸々一本あけ、すっかり上機嫌になった。夕食のあと、二人は酔い覚ましのためにレストランの近くの公園を散策した。

アンジェラはすっかり酔いが回ったらしく、時折くるくると回っては、月を仰いでいた。自分の前を楽しそうに歩いているアンジェラに、ヴェルナーは一ヶ月ずっと気になっていたことを聞いた。

「なあ、アンジェラ。どうして俺を誘ったんだ？」

アンジェラはくるくる回りながら言った。

「ひとりで休みに出かけるなんていやだったからさ。寂しいし、味気ないでしょ？」

「恋人とか、いなかったのか？」

ヴェルナーの問いにアンジェラの動きが止まった。アンジェラはヴェルナーに背中を向けて言った。

「いたよ。……だけど、死んじゃった。ヴェルナーと会う一ヶ月前だよ」

ヴェルナーは何も言うことが出来なかった。そんなヴェルナーに構わずにアンジェラは話し続けた。

「あの映画の前売り券、本当はアイツがくれたんだ。アイツも軍人でさ、やっと休みが合った今日、見に行こうって、私にチケットを渡したの。でもさ、渡した一週間後に事故で死んじゃった。……ばかだよ。私を置いて、勝手に死んじゃうんだもん。付き合う前から、ばかだったけど、死ぬ時も本当にはか、軍人なのに、戦死じゃなくて殉職だったさ。本当に……ばかだよ……」

アンジェラの肩が震えていた。風に乗って、アンジェラの嗚咽が聞こえて来た。ヴェルナーはアンジェラに追いつくと優しく抱きしめた。

ヴェルナーの腕の中でアンジェラは泣き続けた。二ヶ月間、心の中で閉じ込めていた思いを解き放つように。ヴェルナーは何も言わず、アンジェラが落ち着くまで彼女を抱きしめていた。

## 第九話

新帝国暦一四年五月一五日、戦艦サターンの乗組員は二週間の休暇を終え、訓練航海に出航した。ヴェルナーが担当の第一砲撃指揮所で計器のチェックをしていると、アルベルトがヴェルナーに話しかけてきた。

「先輩。クルツリンガー曹長とのデートはいかがでしたか？」

アルベルトは「下品」と形容するに相応しい笑顔を向けた。二枚目で、普段は女性にモテるアルベルトであるが、このときばかりは女性も逃げ出すに違いない。ヴェルナーは後輩のいやらしい笑顔に苦笑しながら言った。

「楽しかったよ。残念ながら、お前の期待していることは何も起こらなかったがな」

何だつまらないと、アルベルトはむくれた。二人は訓練前の計器チェックを済ませていると、アンジエラが指揮所に入ってきて来た。

「テンシユテット中尉。第一から第二八砲塔、チェック終了しました。いつでも訓練に入れます」

アンジエラはチェックリストをヴェルナーに渡すとサインを求めた。ヴェルナーはサインをしてリストを返した。

「ありがとう。曹長」

ヴェルナー自身、アンジエラの態度に違和感を持ったが、その違和

感を言語として変換させたのは彼の隣にいた後輩だった。

「クルツリンガー曹長。どういう心境の変化なんだ？ 急に先……いや、テンシユテット中尉への言葉遣いが変わったみたいだけど……」

「何？ 少尉さん。私が敬語を使っちゃいけないわけ？」

アンジエラはいつもの調子に戻ってアルベルトに言った。アルベルトはアンジエラの勢いに圧され、黙ってしまった。

「いや、いけないことはないよ。むしろ、いいことさ。もうすぐ訓練の時間だ。卿も持ち場に戻ってくれ」

アンジエラは敬礼して指揮所を出て行った。ヴェルナーは少し思うところがあって、アンジエラを追いかけた。

「アンジエラ！」

ヴェルナーが呼ぶ声にアンジエラは振り向いた。

「どうしたの？ ヴェルナー」

ヴェルナーは急いで来たようで少し息を弾ませていた。

「いきなりどうしたんだ？ あれほど、俺たちに敬語を使うのをいやがっていたじゃないか」

ヴェルナーの問いにアンジエラは少し頬を赤らめた。

「あんたが言ったことじゃない。言葉遣いを直せつて。それで、少しでもあんたの役に立てるのなら……その、いいかなって思っただけよ」

アンジェラのらしくなくなるとかむ態度にヴェルナーは笑った。アンジェラは今度は違う意味で顔を真っ赤にした。

「な、何？ その態度！ 人がせつかくあんたのことを思ってるのに」

「いや、ありがたいよ。俺も、少しは上官としての威厳が持てるからね」

ヴェルナーはさわやかな笑顔で笑った。アンジェラは負けたという表情をして、ヴェルナーに言った。

「それじゃ、訓練もあるし、もう行くね。それから、ヴェルナー。訓練のあと、二人で話したいのだけど、いいかな？」

「ああ、かまわないよ。ミーティングルームを空けておくよ」

アンジェラは頷いた。アンジェラの態度を変に思ったヴェルナーであったが、このときは訓練に意識を集中することにした。

## 第十話

ほぼ一ヶ月ぶりになる訓練は良好な成績で終了した。ヴェルナーの砲撃指示が的確だったこともさることながら、砲手達自身の実力も上がっていたことが、成績向上に貢献していた。

初めて着任した次の日から、ヴェルナーは砲手一人一人に砲撃術を教え込んでいた。アンジエラもアルベルトもヴェルナーに協力したこともあり、砲手一人一人の能力も少しずつ、だが確実に上がっていった。

ヴェルナーらの成果は艦の上層部にも伝えられた。

「テンシュテット中尉のチームの成績が上がっています。なかなかのもですよ。これは」

戦艦サターン副長のハインリヒ・ランベルツ・ミッターマイヤー中佐が隣の指揮シートに座る館長のエルンスト・クラウス大佐に言った。

「前回の一・二倍の精度か。たしかに、なかなかのものだな。砲術長も鼻が高かろう」

長く伸びたたくましいあごひげを弄びながら、歴戦の勇士である艦長は言った。

「はい。彼らに触発されたのか、今シミュレーターは満杯だそうです」

「我々も負けていられんな、副長。操艦の腕をあげねばならねばならんぞ。初心に戻ってな」

百戦錬磨の老艦長は笑いながら言った。

ともあれ、ヴェルナーらの成績と努力が砲撃部門に与えた影響は大きく、サターンの対空・対艦攻撃の成績はこれから先、急激に伸びていくことになる。

訓練終了後、ヴェルナーとアンジエラはミーティングルームにいた。アンジエラの話を聞くためにミーティングルームを確保したが、ミーティングルームに入るなり、アンジエラは黙りこくってしまった。訓練前から様子が変だったこともあり、ヴェルナーは心配になってアンジエラに話を切り出した。

「アンジエラ。その、話って言うのは何かな？」

ヴェルナーの問いにアンジエラはびくつと、肩をゆらした。ヴェルナー自身、思いあたるふしはない訳ではなかったので、やり場がなさそうに頭をかいた。

「その、この間は悪かった。大変なことを言っつて、君を傷つけてしまった。謝ろうとは思っていたけど……その……」

「いいの。そのことはもう。ヴェルナー。その……実は……しいの」

アンジエラの声が少しずつ小さくなり、ヴェルナーは最後の言葉が聴き取れなかった。

「え？ なんだって？」

「付き合っただけいいの！ ヴェルナー……あなたが、好きだから……」

ヴェルナーの時間が止まった。何を言われているか全く理解が出来なかった。半ば放心状態のヴェルナーに当のアンジェラは気づかず、話し続けた。

「砲術家として、軍人として尊敬出来るし、このひと月半、ずっと楽しかったんだ。デートした時も本当に楽しくて、これから先もずっとあんと……」

「付き合っただけいい。アンジェラ」

アンジェラの言葉をさえぎって、ヴェルナーは口を開いた。

「もっと早く言い出すべきだったんだ。アンジェラ。君のことが好きだ」

新帝国暦一四年五月一五日、若き砲術家はこのとき、初めての口づけをかわした。



## 第十一話

二人が恋人同士になってから、二人はより多くの時間を共有することになった。二人が恋人同士になったということはすぐに艦全体にいきわたり、「いたって真面目な」副長であるランベルツの頭を悩ませたが、艦長のクラウス大佐がランベルツを制した。

「軍人だからこそ、お互い後悔のないように。しっかりと付き合おうと良い」

それが、艦長が二人に宛てた言葉だった。

艦長のお墨付きをいただいたとはいえ、ヴェルナーもアンジェラも艦内で共有する時間の多くを仕事に割いた。その多くは訓練スケジュールの打ち合わせや戦術の研究であり、時にはアルベルトを交えて深夜に及ぶこともあった。

結局のところ、彼らが本当に恋人同士でいられたのは上陸時休暇のみだった。そのときばかりは二人は軍務を忘れ、普通の男女として休暇を楽しんだ。

こうして、一年以上の月日が過ぎた新帝国暦一五年九月一日、ヴェルナーはアンジェラを自室に呼び出した。

「どうしたの？ 話って」

部屋につくなり、アンジェラはヴェルナーに尋ねた。一年前のアンジェラのように、ヴェルナーにやや落ち着きはなかった。

「あ、ああ、今日、フェザーンの実家から連絡がきてさ。新しい子犬をもらったそうなんだ。名前はマルクって言うんだ。君は犬好きだから、今度の帰港のときに家に遊びにこないか？」

「本当に？　遊びに行っているの？」

「ああ、多分マルクも喜ぶよ」

「楽しみだなあ。どんな子なんだろう、マルク。私に懐いてくれるかなあ」

「ああ、きつと懐くよ。それから、アンジェラ」

嬉しそうに話すアンジェラに、ヴェルナーは真剣なまなざしを向けた。

「その……俺は腕っ節も強くないし、射撃もうまくない。男として頼りがいがある人間とは思えないし……」

ヴェルナーが最初何を言おうとしているのか、アンジェラにはわからなかった。しかし、言葉を積み重ねる度に顔を赤くしていくヴェルナーを見て、アンジェラはヴェルナーが何を言おうとして言葉を紡ぎ上げているのがわかった。それを自覚したとき、アンジェラは胸の高鳴りを感じ始めていた。

「家にいても、読書かジャグリングくらいしか趣味はないし、なんというか、あまり、うまい言葉を言える人間でもないし、今こんなことをこんなところで言うのも、軍人として不謹慎と言うか、もしかしたら地位利用してるんじゃないかって思われるかもしれないけど……だめだな。自分の言葉ではっきり言わなきゃいけないのに、

どうしてこんな気の利かないことしか思いつかないんだ。……つまり、つまり……俺が言いたいのは……俺が、言いたいのは……」

ヴェルナーが一言一言、言葉を重ねる度、アンジェラは胸の高鳴りが徐々に大きくなっていくのを感じた。

「結婚して欲しい！ アンジェラ！」

ヴェルナーは顔を真っ赤にしてアンジェラを見つめた。ヴェルナーの精一杯のプロポーズだった。それを聞き終えたとき、アンジェラの唇が震えた。彼女はヴェルナーのプロポーズを待っていた。彼女は胸の高鳴りと、唇の震えをヴェルナーに悟られないために、笑い出した。

「ぷっ、あはは。何？ それ？ まるで、ヤン・ウエンリーのプロポーズじゃない！」

アンジェラは笑ったあとで、優しく微笑んだ。それはヴェルナーが今まで見たことのない、とてつもなく美しい笑顔だった。

「イエス。イエスよ。ヴェルナー。結婚しましょう」

アンジェラは近い将来夫になる若き砲術家に唇を寄せた。

## 第十二話

ヴェルナーがアンジエラにプロポーズした翌日、新帝国暦一五年九月二日、旧ゴールデンバウム王朝の帝都惑星オーデインにほど近い惑星スレイプニルで地方貴族の反乱が勃発した。首謀者であるフリードリヒ・フォン・ハウザーは旧門閥貴族の一員であったが、時流に乗っていち早くローエングラム陣営に接近し、その私領を安堵させていた。

二〇年近い間、彼は人知れず細々と、そして確実に力をつけていった。辺境星域の海賊を巻き込み、五〇〇〇隻、五〇万人の兵力で彼は堂々と帝国に叛旗を翻した。

この、世に言う「ハウザーの反乱」はローエングラム王朝にとって、最悪な時期に起きてしまった反乱であると言えた。

折しも帝国軍内部においては、大規模軍縮が進められている時期であり、銀河最強の異名を持つ黒色槍騎兵艦隊が解散したのを始め、ワレーン、ミュラーなど帝国の屋台骨を支える提督達の艦隊も再編中であり、出撃出来る状態ではなかった。

そこで、諸提督の艦隊の中で唯一軍縮のあおりをうけていなかったカール・エドワルド・バイエルライン上級大将の艦隊に白羽の矢が立てられた。新帝国暦一五年九月三日、戦艦サターンを含む帝国軍バイエルライン艦隊六、四〇〇隻はフリードリヒ・フォン・ハウザー討伐のため出撃した。

「先輩。残念でしたね。もう少しで上陸だったのに。ご両親に会わせるつもりだったんでしょ。クルツリンガー曹長を」

戦闘指揮所でアルベルトがヴェルナーに言った。

「ああ、けど、この戦いに生き残れば、彼女を連れて行けるさ」

アルベルトの隣で、ヴェルナーは淡々と仕事をこなしていた。

「先輩……不安じゃないですか？ 相手は、今までのとは数が違う。俺たち、もしかしたら……」

いつも楽天的なアルベルトが珍しく悲観的になっていた。ヴェルナーも淡々と仕事をしていたが、その手は震えが止まることはなかった。ヴェルナーは手の震えをアルベルトに悟られないように隠すと、隣に座る後輩を励ました。

「大丈夫さ。アルベルト。あのバイエルライン提督の艦隊だぞ。勝手に決まってるさ。それに、俺たちも生き残るに決まっている」

ヴェルナーは自分に言い聞かせるように言った。

戦闘宙域に到着する前から、ヴェルナーのチームには緊迫した雰囲気漂っていた。ヴェルナーも、アンジエラも、アルベルトもそれぞれ自分の恐怖と戦いながら、なんとか自分たちのチームを暴発ギリギリで押さえ込んでいた。

## 第十三話

新帝国暦一五年一〇月三日、フリードリヒ・フォン・ハウザー率いる反乱軍艦隊と帝国軍バイエルライン艦隊は惑星スレイプニルから約一、五〇〇万キロ離れた宙域で対峙した。

この戦いに参加した兵力は帝国軍艦艇六、四七〇隻、将兵六七万三、五〇〇人。反乱軍艦艇五、四八〇隻、兵力五一万六、七〇〇人であった。

一〇月三日午前一一時三〇分、両軍は最初の砲火を交えた。

「ファイエル！」

バイエルラインの号令と同時に彼の指揮下の艦隊から中性子ビームが発射され、反乱軍艦隊に殺到した。

バイエルラインは自軍の数的優位を利用して、一気に勝負を決めようと凸形陣をしいて攻勢に出た。しかし、思いのほか反乱軍の防御陣が強固で、突破することが出来なかった。ハウザーはただ戦力を整えるだけでなく、戦術研究に関しても一五年の歳月を費やしていた。門閥貴族として、自分自身には戦術指揮能力がないと自覚していた彼は、軍事顧問を密かに雇い、一五年間、艦隊指揮や戦術論、戦略論を徹底的に学んだ。

実際に艦隊を動かすことはなかったハウザーであったが、初戦においては歴戦の提督であるバイエルラインに土をつかせることに成功した。

午後八時ハウザーはいち早く予備兵力を投入し、バイエルライン艦隊に側面攻撃を仕掛けた。

反乱軍の善戦に思わぬ損害を出したバイエルライン艦隊は午後一時、一時後退し、戦力の再編をはかった。

緒戦においては帝国軍劣勢であったが、劣勢の中にも半ば勝利にわく艦があった。戦艦サターンである。サターンは艦隊中央部に位置し、単独のスコアとしては、戦艦二、巡航艦三隻を撃沈していた。乱戦の最中に得られたスコアであったが、ヴェルナーらのチームはこのスコアに士気を大いに上げた。

「やったね！ ヴェルナー！」

アンジェラはヴェルナーのいる第一砲撃指揮所にやってきて抱きついた。ヴェルナーは活発な婚約者を抱きしめた。

「ああ、やったぞ！ 俺たちの戦果だ！」

二人は再び抱きしめあったが、隣にいた後輩の恨めしいまなざしに気づくと、すぐに離れた。

「いや、まあ、いいんですけどね。もうすぐ先輩達は結婚する訳ですし」

アルベルトは口をとがらせて不平を言った。不平を言ったが、その口調には彼なりの優しさに満ちていた。ヴェルナーとアンジェラの結婚を誰よりも喜んでいたのはこの後輩だった。

出撃の直前、彼らはアルベルトに真っ先に婚約を伝えた。アルベル

トは我がことのように喜んだ。ヴェルナー達も誰よりもアルベルトが祝福してくれると考えたため、真つ先に報告をしたのである。次いで、二人はランベルツ、そして艦長のクラウスに報告をした。クラウスも若き砲術家の婚約を喜び、長期休暇を祝儀代わりに与えた。しかし、艦長の祝儀は手の平からさらわれる結果となってしまうた。その数時間後にはサターンは戦場に赴くことになってしまったからであった。

戦果にわくサターンの中で慎重になる二人がいた。副長のランベルツと艦長のクラウスであった。

サターンは戦果をあげたが、艦隊全体では収穫よりも損失の方が勝っていた。しかしながらバイエルライン艦隊は未だ反乱軍よりも優勢な兵力を維持しており、戦局の行方は翌日にならなければならなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6211v/>

---

銀河英雄年代史外伝 サーカスの始まり

2011年10月28日13時27分発行